Blifil の中傷

——その陰謀を実行する手段としての意味——

南井正廣

I

Tom Jones の読者で，主人公 Jones が Blifil の陰謀によって，Allworthy の邸から追放されたことを知らぬ人はあるまい。しかし，陰謀を実行に移す際に，その目的にかなった方法が用いられていることに気づいている人は少ない。周知の通り，Blifil は陰謀によって Jones 追放を実現し，Allworthy の財産と Sophia（Western 家の財産）を独占することを目論んでいる。が，この目的を達成するには厄介な問題があった。如何にして，Allworthy に Jones 追放の正当性を認識させるのか，また如何にして，Blifil が Jones を押しのけて Allworthy の財産のすべてと Sophia を手中に収めることを，無理なく Allworthy に納得させるかということである。もともと，Jones に対して，“. . . you [Jones] have much Goodness, Generosity and Honour in your Temper . . .”[1] という好印象を抱いていた Allworthy に，Jones を追放させるのであるから，かなりの説得力を要する。つまり，Jones が本当は善人ではなく，悪人であるという強烈なイメージを，Allworthy の頭にしっかりと定着させねばならない。また，Blifil が Allworthy の財産や Sophia を独占しようとする場合にも同じことが言える。万事を Blifil の目論見通りに運ぶには，Jones の出生の秘密を隠しておく程度のことでは，不十分であったに違いない。庶出ではあるが Allworthy の血縁者であり，Sophia と相思相愛の仲にあった Jones に，自ら取って代わるだけの大義名

分が，Blifil には是非とも必要となる。そのためにも Blifil は，Jones が極悪人であり，Allworthy やその他の人々の非難の対象となるように仕向けねばならなかった。

こういった難点を克服し陰謀の目的を確実に達成するための有効な手段として，Blifil は中傷という行為を選んでいる。このことは，Blifil が Jones を悪人に仕立て上げ，その追放を実現させていることからも知ることができる。Blifil の立場から，陰謀の目的とその実行手段としての中傷との関係を論ずることだけに終始するのであれば，以上のような考察で十分であろう。

しかし，F. Homes Dudden が主張しているように，*Tom Jones* は，ある1つの結末に向かって，各登場人物やそれぞれの出来事が，互いに関連し合って筋を展開させる周到な工夫のなされた作品である[2]。だから，Blifil の中傷という行為を，ひとり Blifil のみの問題として処理してしまうのは，賢明でないように思われる。作者である Fielding が，陰謀の手段として，Blifil に中傷という行為を選択させていることを忘れてはならない。そうなると，中傷という行為の被害者である Jones の性格や *Tom Jones* 全体の主題とのかかわりにも眼を向けねばなるまい。従って，Fielding 自身の中傷に対する見解を検討して Blifil の中傷の性質を見極めること，中傷という行為を Blifil になさしめている Fielding の意図を明らかにすること，さらに Fielding が作品の中で Blifil の中傷をどのように取り扱っているのかを論ずること——以上の3点を本稿の目的としたい。

II

先ず，中傷に対して，Fielding が抱いていた見解を検討してみよう。*Tom Jones* 第11巻第1章で，Fielding は同時代の批評家達を激しく非難している。作家が苦労して完成させた作品に，不当な悪口を浴びせて作品を排斥し，作家から名声や評判を奪い取ることに熱心な，心ない批評家達が槍玉にあげられている。そのような批評家を弾劾する時に，Fielding が試みて

いる中傷者との類比は，彼が中傷者を如何に理解していたのかを考える上で役に立つ。

> If a Person who prys into the Characters of others, with no other Design but to discover their Faults, and to publish them to the World, deserves the title of a Slanderer of the Reputations of Men; why should not a Critic, who reads with the same malevolent View, be as properly stiled the Slanderer of the Reputations of Books? (II, 567)

とにかく他人の欠点を見つけて世間に公表することだけを念頭に置いて，他人の評判を絶えず穿さくする輩が中傷者ということになる。この Fielding の中傷に対する考え方に影響を与えた思想を突き止めることは，容易ではないが，少なくとも Fielding の尊敬していた広教会派の神学者 Isaac Barrow[3] の見解が，Fielding のそれに近いと言えるのではないか。

> . . . it is the property of a detractor, when he seeth a worthy person, whom he doth not affect, or whom he is concerned to wrong, to survey him thoroughly, and to sift all his actions, with intent to descry some failing, or any semblance of a fault, by which he may disparage him; when he vieweth any good action, he peereth into it, labouring to espy some pretence to derogate from the commendation apparently belonging to it. This in general is the nature of this fault.[4]

Wesleyan 版の *Tom Jones* の注釈者である Martin C. Battestin も，Fielding が第11巻第1章で滑稽な批評家攻撃論を展開するに当って，Barrow の思想や言い回しを意識していた可能性を指摘している[5]。実際，非常に似かよった表現や同じような論の進め方がなされている箇所が存在する[6]ということから判断すると，作家や作品のあら探しばかりをしている同時代の批評家に対する反撃の手段として，Barrow の説教に見られる思想や

言葉使いが利用されていると考えてもよいように思われる。

Fielding は，このように中傷者の一般的性質を披露した後，中傷者を「罪の奴隷」，「社会の害虫」，「悪魔に歓迎される客」と罵倒する。さらに，泥棒や殺人犯でさえ中傷者に比べると罪が軽いと宣言し，その理由を次のように説明している。

> Slander is a more cruel Weapon than a Sword, as the Wounds which the former gives are always incurable. On method, indeed, there is of killing, and that the basest and most execrable of all, which bears an exact Analogy to the Vice here disclaimed against, and that is Poison. A Means of Revenge so base, and yet so horrible, that it was once wisely distinguished by our Laws from all other Murders, in the peculiar Severity of Punishment. (II, 567-568)[7]

不治の傷痕を残す中傷。毒殺に匹敵し厳しく断罪されるべき中傷。Fielding 自身，作家として幾度も激しい中傷を浴びせられた経験があるので，彼の発言内容が冷静な思考に裏打ちされたものであると鵜呑みしてしまうのは，危険な気がする。しかし，個人的感情を差し引くにしても，やはり Fielding が中傷を許すべきでないと考えていたことを示す証拠がある。Fielding は *Tom Jones* 第18巻第1章で，

> If in any Thing I have offended, it was really without any Intention. Some Things perhaps here said, may have hit thee [Reader] or thy Friends; but I do most solemnly declare they were not pointed at thee or them. I question not but thou hast been told, among other Stories of me, that thou wast to travel with a very scurrilous Fellow: But whoever told thee so, did me an Injury. No Man detests and despises Scurrility more than myself; nor hath any Man more Reason . . . . (II, 914)

と，自らの作品の中で無意識のうちに他人を中傷しているのではないかと恐れ，他人のことを口汚なく罵しることを忌み嫌い軽蔑し，自分が中傷という行為に加担する人間でないことを言明している。中傷や中傷者に対して以上のような見解を抱いている Fielding が，*Tom Jones* に於いて主人公が中傷によって苦境に陥いるように仕組んでいるのだから，そこに何か特別な意図が隠されていると考えざるを得ない。

Ⅲ

さて次に，Blifil が陰謀を実現するために Jones にどのような中傷を浴びせているのかに注目し，Blifil の中傷の性質をみてみたい。Jones を悪人に仕立てあげるために，Blifil は Allworthy に以下に述べるように，3つの告発をしている。先ず，Allworthy が危篤状態にあった時に，Jones が飲酒して騒いだこと。2点目は，Blifil が Jones の不謹慎を穏やかに咎めた際に，Jones が彼を悪党呼ばわりして殴りつけたこと。第3点目は，その日の夕方 Jones が森で Molly とよからぬ行ないをしている所を発見して叱責した Thwackum や Blifil を，Jones が叩き据えて怪我をさせたことである。事実を明らかにすれば，この Blifil の告発が中傷であったことがわかる。Jones が酒を飲んで騒いだのは，Allworthy が危険な状態を脱したことを喜ぶあまりにしたことであるから，軽率であったにしても，Blifil の主張するような Allworthy に対する忘恩行為にはならない。また，不謹慎を咎められた Jones が Blifil に殴りかかった直接の原因は，私生児には親に死なれた子供の気持（Allworthy の危篤中に Blifil の母 Bridget が Salisbury で客死したという報告が入っていた）などわかるまいという Blifil からの挑発にあったと言える。Jones が森でみだらな行ないをしていたことは事実であり，酒の力のなせる業と弁護するしかないが，Jones が一方的に殴りつけて Thwackum を負傷させた訳ではないし，Thwackum の鞭による教育のせいで，彼と Jones との仲が相当険悪な状態にあったことも考慮に入れるべき

であろう。よって，Blifil が事実を歪めて Jones を不当に中傷していたことは，容易に察せられる。

Blifil が自らの陰謀をなしとげるために Jones を中傷した後，Allworthy は Jones を追放し，彼のことを悪者呼ばわりするようになる。同時に，Blifil には Allworthy の財産を独占することも可能となり，Sophia の気持以外のもので彼女との結婚を阻むものがなくなったことをも考え合わせると，Blifil は中傷という実行手段を使って，陰謀の目的をほぼ達成したことになる。

だが，ここで微妙な問題が生じてくる。Blifil の動機見え見えの中傷が，Fielding 自身の提示した中傷者の一般的性質に合致するのかということである。既述のように，Fielding は中傷者を他人のあら探しをして世間に公表するだけの目的で，他人の評判を穿さくする輩と規定している。さらに，中傷者の報酬に関して，Fielding は次のように述べている。

> . . . it [Slander] often proceeds from no Provocation, and seldom promises itself any Reward, unless some black and infernal Mind may propose a Reward in the Thought of having procured the Ruin and Misery of another. (II, 568)

引用文から，Fielding が頭に描いていた中傷とは，最悪の場合でも他人を破滅させたと考えて楽しむ以上の報酬はなさそうな行為であることが窺い知れる。そうなると，欲得ずくの Blifil のした中傷は，Fielding の定義に矛盾する。Blifil の陰謀が，Jones に関する根も葉もない悪口雑言によって成立しているのだから，Blifil の取った手段を中傷と呼んでも差支えあるまい。それ故，Blifil の行った中傷と，Fielding の意味する中傷との違いを無理なく説明するために，中傷という言葉の意味を再検討せねばならない。

Fielding は，*Tom Jones* に於いて中傷者という意味で "slanderer" という語を用いている。そして，彼が中傷者の一般的性質を表現する際に，

Barrow の説教を意識していたことは，先に指摘した通りである。しかしながら，奇妙なことに，Barrow は Fielding と同じ意味内容を表わす言葉として別の語 "detractor" を使っている。Barrow によれば，立派な人物もしくは立派な行為をあれこれ穿さくして欠点を見つけ出し，それによってその行為者を非難する所業，それを成し遂げるためには，善意善行を曲解し誤り伝えることをも辞さぬ所業は[8]，"detractor" のなせる業となる。それでは，Barrow は "slanderer" にどのような意味を託していたのであろうか。Barrow の Sermon XVIII "The Folly of Slander" の中に，以下のような "slander" の本質が明示されている。

> Slander thence hath always been a principal engine, whereby covetous, ambitious, envious, ill-natured, and vain persons have strove to supplant their competitors, and advance themselves; meaning thereby to procure, what they chiefly prize and like, wealth, or dignity, or reputation, favour and power in the court, respect and interest with the people.[9]

同じ中傷でも "slander" は，それによってライバルに取って代わり，自らの望むもの（財産，名声，権力等）を獲得するための中傷を意味する。

Fielding 自身，作家として敵対者から数多くの中傷を浴びせられてきた。しかしながら，彼の受けてきた中傷は，彼を誹謗文書の作者に仕立て上げたり[10]，彼の過去を暴きたてたりすることによって[11]，彼を世間の笑い者にし，あわよくばその社会的信用の失墜を狙うという類の中傷であった。故に，Barrow の言う意味での "slander" とは言い難い。むしろ，"detraction" と言えるのではないか。そうなると，Fielding は "detraction" の意味で "slander" という語を用いたことになる。ここで，彼の語感が鋭いものであったかのかどうかを論ずるつもりはないが，要するに *Tom Jones* 第11巻第1章では他人を蹴落とすために悪口雑言を浴びせるという行為を，広意

に "slander" と表現していると考えることができる。

従って，Fielding の中傷に対する見解を議論する時には，"detraction" と "slander" の意味の違い[12]は，あまり関係なさそうである。が，Blifil の中傷の性質を吟味する際には，この Barrow 式の言葉の使い分けが有効適切なように思える。Blifil の中傷を詳細に検討すると，"detraction" と "slander" の双方の特徴が備わっていることが判明するからである。Blifil は，Jones 追放の正当性を Allworthy に認めさせるために，Jones を中傷し Jones から「善人という名」を剝脱した。この意味での中傷は，"detraction" の範疇に入るであろう。また，Jones 追放を実現し Jones を押しのけて Allworthy の財産と Sophia を独占するために，Blifil が用いている中傷は，"slander" の性質を帯びていることになる。従って，Blifil が陰謀を実行するに際して行っている口頭による攻撃は，"detraction" と "slander" の双方の特徴が合体された強烈な誹謗中傷行為と呼びうるのではないだろうか。

Ⅳ

それでは，"detraction" という意味での中傷（誹謗）でさえ，「社会の害虫」，「毒殺にも匹敵する行為」と評していた Fielding が，*Tom Jones* の中で "detraction" と "slander" の合体した，さらに悪質な所業を登場人物になさしめているのは何故だろうか。

Tom Jones の主題に関しては，いろいろ議論の分れる所であるが，エンディングに於いて，"He [Jones] hath also, by reflexion on his past Follies, acquired a Discretion and Prudence very uncommon in one of his lively Parts (II, 981)" と記されていることから判断すれば，Jones の "prudence" の獲得という問題が大きなテーマであることは間違いあるまい。それ故，Jones が一連の行動から学んだ "prudence" の内容と，Blifil の中傷とのかかわりが解明されれば，Fielding の意図が見えてくるのでは

ないだろうか。

Battestin は，*Tom Jones* の中には3種類の "prudence" が存在していて，読者は文脈に応じてそれらを見分ける能力を試されているのだという興味深い発言をしている[13]。1つは，聖書や Shafesbury の思想と共に，*Tom Jones* の倫理的基盤と考えられている，Cicero の思想[14]に見られる "*prudentia*" である。Cicero は，*De Inventione* の中で，それを次のように定義している。

> Prudentia est rerum bonarum et malarum neutrarumque scientia. Partes eius; memoria, intellegentia, providentia. Memoria est per quam animus repetit illa quae fuerunt: intelligentia, per quam ea perspicit quae sunt; providentia, per quam futurum aliquid videtur ante quam factum est.[15]

善悪を判断する能力——過去の経験から現実を把握し未来を予測して，悪を避ける能力が，"*prudentia*" ということになる。もう1つの "prudence" は，この Cicero の "*prudentia*" の影のような存在で，悪い目的のために用いられる「"prudence" の偽物」と看做すべきものである。Barrow の説によれば，この "prudence" は以下のようになる。

> The prudence of faith is indeed the only prudence considerable; all other prudence regarding objects very low and ignoble, tending to designs very mean or base, having fruits very poor or vain. To be wise about affairs of this life (these fleeting, these empty, these deceitful shadows) is a sorry wisdom; to be wise in *purveying for the flesh*, is the wisdom of a beast, which wise enough to prog its sustenance; to be wise in gratifying fancy, is the wisdom of a child, who can easily entertain and please himself with trifles; to be wise in contriving mischief, or embroiling things is the wisdom of a fiend, in which the old serpent, or grand politician of hell, doth exceed all the Machiavels in the world. . . .[16]

習得しても空しい結果しかもたらさない智恵——Machiavelli の "prudence"[17] をはるかに凌ぐ私利私欲を満たすための権謀術策にたけていることと考えておけばよいであろう。第3の "prudence" は，金儲けや立身出身のための処世術として役立つ "prudence" を意味する。18世紀になって，中産階級の人々が抬頭してくるのと相俟って，影の存在であった「"prudence" の偽物」が市民権を得たものと理解することができる。

> . . . self-discipline, discretion, foresight, expediency came to be valued for mercenary reasons . . . as the surest means of prospering in the world. . . . In this new context, the prudent person is coolly self-interested—even, in the fact, hypocritical: he prizes the reputation of virtue more than virtue itself, since a good name can be profitable to him, will enable him more easily to use others to his own advantage; he is seldom open or candid (and then only by design), since he must conceal his true motives from those he hopes to gain by; he is never passionate. since only the man who is in control of himself can hope to manipulate others[18].

Jones が学んだ "prudence" は，これら3つの中のどれに該当するのであろうか。物語の終盤で，Jones は精神の行き詰まりの象徴である監獄に於いて[19]，自らの過去の悪行愚行を反省している。このことから，Jones が Cicero の "*prudentia*" を習得していたことは，容易に推察されよう。

しかしながら，ここで生じる不都合を見逃がしてはならない。悪い目的のために，手練手管を弄する「"prudence" の偽物」は，識別しやすいであろうが，自らの自覚を促して有徳人になることを目的とする Cicero の "*prudentia*" と現世的な利益追求を目的とする第3の "prudence" とは，目的は異にしながらも方法が似かよっているので紛わしい。とりわけ，この打算的偽善者の "prudence" に於いて，「世間的評判」，「善人であるという看板」が尊重されているために，世間の人々にとって，双方の "prudence" を

識別することが至難の技になることが予想される。これでは，いくら善良な心の持主が Cicero の "*prudentia*" を習得していても，自らの評判に異常に注意を払う打算的偽善者と区別してもらえなくなる。そしてさらに悪いことには，善人と言えども「善人という名」を保持することを忘れば，その無防備さを敵に利用され，悪人の烙印を押されて味方の軽蔑を招くようなことにもなりかねない[20]。Allworthy に追放されロンドンへ向かう途中の村で，Jones は Mr. Dowling に，このことを裏付ける発言をしている。

> . . . it is lately, very lately, that I have found him [Blifil] capable of the basest and blackest Designs; for, indeed, I have at last found out, that he hath taken an Advantage of the Openness of my own Temper, and hath concerted the deepest Project, by a long Train of wicked Artifice, to work my Ruin, which at last he hath effected. (II, 657)

不品行を繰り返しはしたが，心は善良であった Jones が，このような羽目に陥った原因は彼の無分別，Aurélien Digeon の言葉を借りるならば，自らの良心の命ずることを，外見にとらわれずに単純に信じてしまい，すぐに自分の正体を他人に知らせてしまって，悪人に付け込まれる温床を，Jones 自身が作ったということになる[21]。

それ故，善良で情け深い性質の持主であっても，また仮にその人物が Cicero の "*prudentia*" を学んでいるにしても，世間の人々から誤解されて悪人や打算的偽善者に利用されぬようにするために，自衛手段を講ずる必要が生じてくる。*Tom Jones* 第3巻第7章で，Fielding は自ら舞台に登場して読者に次のように訴えかけている。

> Goodness of Heart, and Openness of Temper, tho' these may give them [Readers] great comfort within, and administer to an honest Pride in their own Minds, will by no Means, alas! do their Business in the World. Prudence and Circumspection are neces-

sary even to the best of Men. They are indeed as it were a Guard to Virtue, without which she can never be safe. It is not enough that your Designs, nay that your Actions are intrinsically good, you must take Care they shall appear so. If your Inside be never so beautiful, you must preserve a fair Outside also. This must be constantly looked to or Malice and Envy will take Care to blacken it so, that the Sagacity and Goodness of an *Allworthy* will not be able to see through it, and to discern the beauty within. Let this, my young Readers, be your constant Maxim, That no Man can be good enough to enable him to neglect the Rules of Prudence; nor will Virtue herself look beautiful, unless she be bedecked with the outward Ornaments of Decency and Decorum. (I, 141)

どんなに善良であっても，外見に注意を払って善良に見せないと，安閑としていられないという主旨である。この考え方は，次作 *Amelia* に於いて個人と社会の関係にまで発展させて論じられている。

As the malicious Disposition of Mankind is too well known, and the cruel Pleasure which they take in destroying the Reputations of others, the Use we are to make of this Knowledge is to afford no Handle to Reproach; For, bad as the World is, it seldom falls on any Man who hath not given some slight Cause for Censure, though this, perhaps, is often aggravated Ten thousand Fold; when we blame the Malice of the Aggravation we ought not to forget our own Imprudence in giving the Occasion.[22]

もちろん，Fielding は Mandeville や Hobbes のような人間観（彼らは人間の本性を，堕落した利己的なものと見做す思想家であると，Fielding は考えていた）を信奉する人ではなかった。しかし，個人が無分別に非難を受ける口実をつくってしまったら，社会というものがどれほど恐ろしい存在と

なって我々に迫ってくるかということを，Fielding はその思想の代弁者である Dr. Harrison に警告させているのであろう。

以上をまとめてみると，Fielding が Jones に習得させたかった "prudence" は，Cicero の "*prudentia*" に，打算的偽善者達が重んじていた「外観への配慮」，「善人としての評判」の保持という面が加味されたものを意味することになる。そして，Fielding がこの実践的な智恵を授けたかったのは，ひとり Jones だけに留まらない。先の引用文に於いても Fielding が対象にしていたのは読者なのである。Jones が不幸を招いた原因を，教訓として読者に伝えること。これこそが，Fielding の目的であったに違いない。

Fielding は，*Tom Jones* の中で3つの効果的な方法を凝らすことによって，この実践的英知の啓蒙を行なっている。1つは，Fielding 自身が姿を現わして読者に自らの主張を伝えること（Fielding は，第3巻第7章に於いてナレーターではなく作者が登場すると断っている）。2番目の方法として，Jones と Allworthy との会話の中に，"prudence" の大切さを盛り込むという工夫をしている[23]。そして，3番目の，最も効果的な方法が，実例の提示なのである。Jones が不幸を招いたのは，数多くの不品行を繰り返したことだけにあったのではない。心は善良であっても不良青年の顔を見せていれば，足許を掬われるようなことになりかねないことを，Jones は自覚すべきだった。それだからこそ，Fielding は自らの訴えたい意味の "prudence" を読者に伝えるために，外見を考慮しない無分別な善玉と，善良に見せている悪玉と，彼らを外見からしか判断できない裁き人を創り出し，誹謗中傷という悪質な行為によって善玉が陥れられるという状況を，わざわざ設定したのである。無分別な善玉を読者自身，悪玉を悪人または打算的偽善者，外見のみによって裁く人を世間に，それぞれ置き換えれば，Blifil の誹謗中傷という行為が読者に与えるインパクトは，想像に難くない。Blifil の陰謀に見られる誹謗中傷は，このように *Tom Jones* の主題と密接に関連している。

V

Jones が Allworthy に追放され，Sophia と離別させられ，あげくの果ては投獄の憂目を見たことに鑑みると，Blifil の中傷の効果はかなりのものであったと言える。その反面，Blifil の中傷それ自体は，あらかじめ読者に予告されているわけでなく，あまりにも唐突に，安易に行なわれている気がしないでもない。ここでは Fielding が Blifil の人物描写をする際に，どのような点に留意しているのかを検討し，Blifil の誹謗中傷という行為が唐突になされている理由を考察してみたい。

Jones にひどい中傷を浴びせているくらいであるから，Blifil が悪い人物として描かれているのは当然である。Blifil の性格を端的に表現すれば，「真面目で思慮を富み信心深いようだが，実は好色で利己的な偽善者」[24] ということになろう。Fielding は登場人物を創り出す時に，蓋然性の限度を越えぬように注意していた (*Tom Jones* 第8巻第1章)。だが，悪人に関して，特に Blifil については，この法則があてはまらぬように思われる。Fielding 自身，"Knavery and Folly, though never so exorbitant, will more easily meet with Assent; for Ill-nature adds great Support and Strength to Faith (I, 402)" という見解を表明しているものの，Blifil に善良な点がかけらも見られないのでは，読者は Blifil の存在を疑いたくなってしまう。事実，Blifil が存在感のない悪漢だという指摘もなされている[25]。

しかしながら，Blifil が存在感を伴わないような，全くの悪人であることは，*Tom Jones* という作品が成立するための必要条件でもある。何故ならば，Blifil は Jones の引き立て役という宿命的な役割を担っているのだから。Digeon が評しているように，"The honest man who seems to play the rogue"—Jones と "the rogue who plays the part of an honest man"—Blifil とが並置されれば，Jones が一段と輝いて見えるという計算が成り立つ[26]。それ故，Blifil には，Jones の見せかけとしての悪人のイメージを

凌ぐ，極悪人としてのアピール—“incredibly wicked[27]” が絶対不可欠だと言えよう。

他方，Blifil の性格を規定するもう1つの条件がある。*Tom Jones* の喜劇性である。Fielding は *Tom Jones* を，“Prosai-comi-epic Writing (I, 209)” と呼んでいる。また，次作 *Amelia* の中で扱われている悪よりも *Tom Jones* に見られる悪の方が痛烈であるのに，読者は *Tom Jones* を読む際に，*Amelia* の時ほど深刻な怒り，不安，憐れみを感じないという意見すらある[28]。ここでは，*Tom Jones* の喜劇性を Blifil の人物描写のみに限って，論を進めてゆくことにする。

先ず第1に考えられることは，Blifil は Iago でないということである。これは，R. S. Crane の Blifil で，彼はそれを次のように説明している。

> As a villain . . . he is no Iago but merely a clever opportunist who is likely to overreach himself (as the failure of his first shemes shows) and whose power of harm depends entirely on the blindness of Allworthy; he deceives Tom only temporarily and Sophia and Mrs. Miller not at all; and after we have seen the display of his personal ineptitude in the proposal scene with Sophia; we are prepared to wait, without too much active suspense, for his final showing-up.[29]

Crane によれば，Iago の場合と違って，読者は Blifil に軽蔑を感じることはあっても，深刻な怒りや恐怖心を感じることはできないということになる。そして，このような読みを可能にしている要因として，Blifil が喜劇の登場人物であるということが考えられる。たとえ Blifil が極悪人であるにしても，あまり深刻な怒りや恐れを読者に感じさせぬように配慮しなければ，*Tom Jones* が喜劇でなくなってしまうのである。

Fielding が登場人物の内面を知らせまいとしていることも，喜劇性との関連で言及しておくべきであろう。これには，さまざまな理由が挙げうる

が，ここで強調しておきたいことは，読者が登場人物の心理を逐一理解して一心同体となっていたのでは，登場人物自身が笑いの担い手となっている喜劇というさらに大きな枠組の中で作者が提供してくれるユーモアを，味わうことができなくなってしまうことである[30]。例えば，Jones の心境が微細に報告されれば，読者は彼の苦境を深刻に受け止めてしまって，彼の愚かしさを笑う余裕がなくなってしまうであろう。同じようなことが，Blifil にも言えるのではないだろうか。Fielding は，

> . . . it would be an ill Office in us to pay a Visit to the inmost Recesses of his [Blifil's] Mind, as some scandalous People search into the most secret Affairs of their Friends, and often pry into their Closets and Cupboards, only to discover their Poverty and Meanness to the World. (I, 159)

と弁明して，Blifil の心理に迫まることを巧みに避けているが，Blifil の内面が明らかにされると，読者は彼に激しい怒りや深刻な恐怖心を感じるようになり，*Tom Jones* 全体の喜劇としてのバランスが狂ってしまうことになりかねない[31]。

このように考えると，Blifil という人物が創り上げられる際に機能している法則のようなものが浮かび上ってくる。彼は，Jones の敵役として極悪でなければならない。しかし，同時に喜劇の登場人物として，読者に，喜劇が成り立たぬほどの怒りや恐怖心を感じさせてはならない（軽蔑を感じさせることはあるにしても）のであり，喜劇の登場人物であるが故に，心理描写がなされることも許されていないのである。

Blifil の人物描写を支配しているこのような法則が，彼の行動にも制限を加えていることは，言うまでもない。既に論及したように，Blifil の中傷は，単なる誹謗（それでさえ Fielding は，「毒殺にも匹敵する行為」だと考えていた）を，はるかに凌駕する一層悪質な所業であった。よって，彼の誹謗中傷行為は，彼の "incredible wickedness" を読者にアピールする格好の手

段と言えよう。しかしながら，*Tom Jones* の喜劇性を保持するためには，その行為が Blifil の頭の中に萌芽として存在した段階から，立派な計画になり実行に移されるまで，詳細に読者に報告することは，絶対に避けられねばならない。Jones に対する Blifil の中傷があまりにも唐突になされている背後には，Blifil の人物描写を支配している法則や *Tom Jones* の喜劇性に対する，Fielding の周到な配慮が隠されているのである。終盤に至って Jones の出生の秘密が明らかにされるまで，Blifil の極悪な行為の全貌を完全に把握できぬようにしている Fielding の手法は見事と言うしかない。

Ian Watt は，喜劇性を保つために，内面の描写をすることが許されない *Tom Jones* の登場人物は，大げさな身体反応によって，その感情を表出していると述べている[32]。例えば，登場人物は悲しいことがあったり，感極まった時に涙を流すことが多い。私の計算によると，涙を意味する語（"Tears". "a Tear". "Pearls". "briny Stream"）は，*Tom Jones* 全体の中で86回も用いられている。こうなると読者には，Fielding が心理描写をする代わりに，「涙を流す」という仕掛けを利用して，その代弁をさせているのではないかと思えてくる。Blifil の中傷行為もまた，このように解釈することができるのではないだろうか。さまざまな制約があるために，微細に描写されてはならない Blifil の Jones に対する悪意，Blifil の狡猾さなどが，Blifil の行為を通して読者に伝わるはずであろうから。涙が悲しみや感動を表現するために用意された小さな仕掛けであるなら，Blifil の誹謗中傷は彼を悪人に仕立て上げるための大仕掛けとして，作品の中で機能していると言えるのではないだろうか。

（本稿は，1987年9月に同志社大学英語英文学研究会にて「*Tom Jones* に於ける Blifil の讒言の意味について」と題して，さらに1987年12月に18世紀英文学研究会例会にて「Blifil の陰謀に見られる誹謗中傷」と題して行なった口頭発表に加筆し，改題したものである。）

註

1 Henry Fielding, *The History of Tom Jones. A Foundling*, ed. Martin C. Battestin ("The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding," Middletown. Connecticut: Wesleyan University Press, 1975), I, 244. 以下このテキストからの引用はその直後の括弧内に巻数とページ数のみを記す。

2 F. Homes Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times* (New York: Oxford University Press, 1952), II, 617. 尚、*Tom Jones* のプロットに関しては，同書，II，616-627 で詳細に論じられている。

3 Fielding が Isaac Barrow を敬愛していたことは，1752年4月11日付の *The Covent-Garden Journal* の中で，Fielding が Barrow のことを，"our favourite Dr. Barrow", "the divine Founder of our Religion", "my beloved Author Dr. Barrow" などと繰り返し称賛していることから十分に察せられる。(Henry Fielding, *The Covent-Garden Journal*, ed. Gerard Jensen [New Haven: Yale University Press, 1915. Reprinted New York: Russell & Russell, 1964], I, 305-309).

4 Isaac Barrow, Sermon XIX, "Against Detraction," in *The Works of Isaac Barrow, D. D.* (New York: C. Riker, 1845), I, 204.

5 Henry Fielding, *The History of Tom Jones: A Foundling*, II, 566n.

6 中傷者の一般的性質に関する Fielding の見解と Barrow の思想との類似については，本文中に既に指摘しておいた。また，Fielding と Barrow の双方が，中傷という行為が犠牲者に残す傷痕について，同じような言い回しをしていることは，註7を見れば明らかである。さらに Fielding は，批評家攻撃論を "Judgement" という語の本来の意味が理解されていないと，主張することから開始しているが，そこでも Barrow の説教のパターンの踏襲が見られる。というのは，Barrow も中傷に関連した説教—Sermon XX, "Against Rash Censuring and Judging"—の本論を展開するに当って，"Judge" という語の語源が十分に理解されてないことを，指摘していたからである。参考までに，以下にその該当箇所を引用しておくと，

> This Word Critic is of *Greek* Derivation, and signifies Judgement. Hence I presume some Persons who have not understood the Original, and have seen the *English* Translation of the Primitive, have concluded that it meant Judgment in the legal Sense, in which it is frequently used as equivalent to Condemnation. (II, 566)

という Fielding の論の進め方が，下記の Barrow のそれとよく似ていることが窺い知れる。

> *Judge not*. As to the word, we may observe, that it being in itself, accor-

ding to its primitive sense, of a middle and indifferent signification, is yet frequently in the scripture used in the worst sense; so as to import those acts, or those effects of judgment, which pass to the disadvantage of the persons subjected thereto; for condemnation and for infliction of punishment: and this sense here surely the word doth principally respect . . . . (Isaac Barrow, Sermon XX, "Against Rash Censuring and Judging," *Works*, I, 211)

7 Barrow も Sermon XVIII, "The Folly of Slander" で，中傷によって受ける傷の深さを，同じように表現している。

Many (saith another wise man, the imitator of Solomon) *have fallen of the sword: but not so many as have fallen by the tongue*. . . . Incurable are the wounds which the slanderer inflicteth, irreparable the damages which he causeth, in delible the marks which he leaves. *No balsam can heal the biting of a sycophant*; no thread can stitch up a good name torn by calumnious defamation; no soap is able to cleanse from the stains aspersed by a foul mouth. (*Works*, I, 197-198)

8 "detraction" の性質を Barrow は，Sermon XIX, "Against Detraction" に於いて，次のように定義している。

It [detraction] is the fault . . . which, out of naughty disposition or design, striveth to disgrace worthy persons, or to disparage good actions, looking for blemishes and defects in them, using care and artifice to pervert or misrepresent things to that purpose. (*Works*, I, 203-204)

9 Isaac Barrow, Sermon XVII, "The Folly of Slander," *Works*, I, 187.

10 誹謗文書の作者に仕立て上げられたことについて，Fielding は，"And what is severe Fate, I have had some of the abusive Writings of those very men fathered upon me, who in other of their Works have abused me themselves with the utmost Virulence (II, 914)" と自らの苛酷な運命を述懐しているだけでなく，この種の誹謗中傷に対する抗議も行なっている。1743年に出版された *Miscellanies* の序文では

. . . as I have been very unjustly censured, as well on account of what I have not writ, as for what I have; I take this Opportunity to declare in the most solemn Manner, I have long since (as long as from *June* 1741) desisted from writing one Syllable in the *Champion*, or any other public Paper; and that I never was, nor will be the Author of anonymous Scandal on the private History or Family of any Person whatever. (Henry Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq*, ed. Henry Knight Miller ["The Wesleyan Edition of the

Works of Henry Fielding," Oxford: the Clarendon Press, 1972], I, 14)

という宣言をしている。この他に，1744年に Fielding の妹 Sarah が出版した *David Simple* 第2版の序文に於いても，同様の主旨の抗議がなされている。詳しくは，Sarah Fielding, *The Adventure of David Simple* (Oxford: Oxford University Press, 1987), pp. 3-4 を参照のこと。

11 Fielding が中傷者に過去を暴きたてられていたことは，*Tom Jones* とほぼ同時期に刊行されていた *The Jacobite's Journal* の記事からも推察される。詳しくは，Henry Fielding, *The Jacobite's Journal and Related Writings*, ed. W. B. Coley ("The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding," Oxford: the Clarendon Press, 1974), pp. 235-236 を参照のこと。

12 ここで参考資料として "detraction" と "slander" の意味の違いを，辞書的な面から指摘しておく。*The Oxford English Dictionary* (Oxford: the Clarendon Press, 1970) では，"detraction" は，

> The action of detracting from a person's merit or reputation; the utterance of what is depreciatory or injurious to his reputation: depreciation, disparagement, defamation, calumny, slander

と定義されている。また，Samuel Johnson は，*A Dictionary of the English Language* (London: W. Strahan, 1775. Reprinted New York: AMS, 1967) に於いて，

> *Detraction*, in the native importance of the word, signifies the withdrawing or taking off from a thing; and, as it is applied to the reputation, it denotes the impairing or lessing a man in point of fame, rendering him less valued and esteemed by others, which is the final aim of *detraction*, though pursued by various means.

と，"detraction" という語を解説している。これら2つの説明から，"detraction" は「減ずること」が本来の意味であり，それが人の名誉を傷つけるようなことを言って，その人の価値や他人から受ける評価を低くするという意味に転用されている。よって，"detraction" には，他人を傷つけたり，他人から何かを奪い取るといった強い目的意識は含まれていない。

他方，"slander" については，*OED* に "A false or malicious statement or utterance intended to injure, defame, or cast detraction on the person about whom it is made" と記され，用例として，"Count de Villefort has detected the slanders that have robbed me of all I hold dear on earth" (Ann Radcliff の *The Mysteries of Udolpho* より) が挙げられている。つまり，「他人を傷つける」あるいは「他人から何かを奪い取る」といった目的が，非常に明確に包含されている語と言えよう。以上のように，Barrow 式の語の使い分けは，辞書的にもある程度実証

されうる。以後，本稿では "detraction" には「誹謗」または「中傷（誹謗）」という訳語を，"slander" には「中傷」という訳語を付して，それぞれを区別していくことにする。

13 Martin C. Battestin, *The Providence of Wit: Aspects of Form in Augustan Literature and the Arts* (Oxford: the Clarendin Press, 1974), p. 176. 尚，本書の第6章 "Fielding: The Definition of Wisdom" は，"prudence" の重層性を論じた非常に示唆に富む論文であり，本稿第Ⅳ章執筆に際し参考にしたことを，お断りしておく。

14 F. Homes Dudden, II, 679.

15 Cicero, *De Inventione*, Vol. II of *Cicero*, trans. H. M. Hubbell ("the Loeb Classical Library," London: William Heinemann, 1976), p. 326. 参考までに，以下に英訳を付しておく。

Wisdom is the knowledge of what is good, what is bad and what is neither good nor bad. Its parts are memory, intelligence, and foresight. Memory is the faculty by which the mind recalls what has happened. Intelligence is the faculty by which it ascertains what is. Foresight is the faculty by which it is seen that something is going to occur before it occurs. (p. 327)

16 Isaac Barrow, Sermon II, "Of Faith," *Works*, II, 190-191.

17 Machiavelli が，どのような意味で，"prudence" という語を用いていたのかということを，参考資料として紹介しておく。Machiavelli は，君主が貴族と庶民を同時に手なづけるために議会を設けたことを，思慮ある処置と呼び，その理由を次のように説明している。

For the one who ordered that kingdom [France], knowing the ambition of the powerful and their insolence, and judging it necessary for them to have a bit in their mouths to correct them, and on the other side, knowing the hatred of the generality of people against the great, which is founded in its fear, and wanting to secure them, intended this not to be the particular concern of the king, so as to take from him the blame he would have from the great when he favored the popular side, and from the popular side when he favored the great; and so he constituted a third judge to be the one who would beat down the great and favor the lesser side without blame for the king. This order could not be better, or *more prudent*, or a greater cause of the security of the king and the kingdom. From this one can infer another notable thing: that princes should have anything blameable administered by others, favors by themselves. Again I conclude that a prince should esteem

the great, but not make himself hated by the people [Italics mine] (Niccoló Machiavelli, *The Prince*, trans. Harvey C. Mansfield, Jr. [Chicago: The University of Chicago Press, 1985], p. 75)

18 Martin C. Battestin, p. 173.

19 監獄が魂の混乱状態，行き詰まりを象徴的に意味しているというのは，Boetius 以来の伝統である。Martin C. Battestin, *The Moral Basis of Fielding's Art: A Study of Joseph Andrews* (Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1959), p. 49 で論じられている Wilson の投獄と Boetius の投獄の類似性に関する指摘は，この問題を考える際に有益である。

20 Martin C. Battestin, *The Providence of Wit*, p. 173.

21 Aurélien Digeon, *The Novels of Fielding* (London: Routledge, 1925. Reprinted New York: Russell & Russell, 1962), p. 144.

22 Henry Fielding, *Amelia*, ed. Martin C. Battestin ("The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding," Oxford: Clarendon Press, 1983), p. 100.

23 例えば，*Tom Jones* 第5巻第7章で，Allworthy は Jones に，次のような忠告をしている。

'I am convinced, my Child, that you have much Goodness, Generosity and Honour in your Temper; if you will add Prudence and Religion to these, you must be happy: For the three former Qualities, I admit, make you worthy of Happiness, but they are the latter only which will put you in Possession of it. (I, 244)

また，第18巻第10章に於いても，Allworthy は Jones に同じような説教をしている。

'. . . Prudence is indeed the Duty which we owe to ourselves; and if we will be so much our own Enemies as to neglect it, we are not to wonder if the World is deficient in discharging their Duty to us; for when a Man lays the Foundation of his own Ruin, others will, I am afraid, be too apt to build upon it. (II, 960)

24 Arnold Kettle, "Tom Jones," in *Fielding: A Collection of Critical Essays*, ed. Ronald Paulson (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1962), p. 86.

25 Blifil が非現実的な存在であることに関しては，F. Homes Dudden, II, 655 や Aurélien Digeon, p. 158 で指摘されている。

26 Aurélien Digeon, p. 158.

27 F. Homes Dudden, II, 656.

28 R. S. Crane, "The Plot of *Tom Jones*," in *Twentieth Century Interpretation of*

Tom Jones, ed. Martin C. Battestin (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1968), pp. 83-84.

29 *Ibid*, p. 84.

30 Ian Watt, *The Rise of the Novel* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1957), p. 273.

31 R. S. Crane. p. 91.

32 Ian Watt, p. 274.

Synopsis

THE MEANING OF BLIFIL'S SLANDERING: A STUDY OF THE WAY TO EFFECT HIS BLACKEST DESIGN

Masahiro Minai

It is well-known to every reader of *Tom Jones* that Blifil succeeds in banishing Jones from Allworthy's presence by carrying out his blackest design. As his means to the design Blifil adopts slandering Jones. (The blackest design means the whole plan by which the anticipated result is produced, and slandering, the way to realize the result.) There are two aims in Blifil's slandering. One is to deprive Jones of the name of a good man. The other is to supplant Jones and have both Allworthy's wealth and Sophia to himself. Fielding's beloved divine, Isaac Barrow, classifies the former kind of scurrilous attack as "detraction" and the latter as "slander." As shown in *Tom Jones*, Fielding even calls the scurrilous attack, mentioned above as "detraction." the act of an abject slave of vice, of an odious vermin produced by society. Nevertheless, Fielding introduced into his work the scurrilous attack which has two wicked aims. We cannot help surmising that his introduction of slandering reveals his own special intention.

Jones's acquisition of "prudence" is the theme of *Tom Jones*. And, the kind of "prudence," which Jones learns, means a proper regard to his outward appearance as well as the ability to judge what is good

and what is bad from his experineces. What "prudence" means is connected with Blifil's slandering. The eighteenth century is the time when a host of self-seeking hypocrites, whose interest is always to reach worldly success, were coming to the fore. They tried to achieve a comfortable reconciliation between morality and Mammon; their purpose in life was to get on in the world and make money by pretending to be virtuous, so they make every effort to preserve their good names. The appearance of this kind of hypocrite results in threatening good-natured persons, who are not interested in how they appear to others. If one neglects making efforts to appear good, even the best person in the world will be vulnerable to the malicious designs of the hypocrites and be branded as a bad man by them. To survive in the world full of such self-centered hypocrites, Fielding emphasizes, people should never forget proper regard for their reputation, although they should, of course, preserve their moral health. This is the lesson not only for Jones but also for the readers of *Tom Jones*.

Fielding chooses the presentation of a concrete example to his readers as the most effective way to give this useful lesson of life. The following three types of characters are created intentionally: the good-natured person whose indiscretion is to pay little attention to reputation (Jones=the readers of *Tom Jones*), the villain who does everything possible to appear good (Blifil=the self-seeking hypocrites), and the incapable judge who estimates others by appearances only (Allworthy =the world). Fielding also introduces into *Tom Jones* situations in which the imprudent man of good nature is entrapped by a wicked act—slandering. Through the characterization and setting, Fielding tries to teach his readers how a good-natured preson should live. To

attain this purpose he has Blifil adopt slandering as the means to carry out his blackest design.

The sudden appearance of Blifil's slandering seems strange to the readers of *Tom Jones*. The reason can be found in the law under which the character of Blifil is portrayed. Blifil must be an incrediblly wicked man to act as a foil for Jones, the good-natured man; Blifil's slandering serves to unmask what he really is, showing his villainy. We cannot forget either that Blifil is a character belonging to the comic world. If we identify ourselves with Blifil, we will feel the fear and indignation about Blifil seriously; thus we won't be in any mood to appreciate the humour of the larger comedy in which Blifil is also a risible participant. Fielding has to avoid the detailed description of Blifil's mental state. To sum up. Blifil is characterized under the following two conditions: the exposure of villainy and the avoidence of psychological description. These conditions, needless to say, influence the presentation of Blifil's action—what he did to effect his blackest design. The sudden appearance of Blifil's slandering, in which his incredible wickedness is shown, results from the fact that Fielding applies the two conditions about Blifil's characterization to what Blifil does.

Blifil's slandering as the way to carry out his blackest design is, it will become clear from our discussion, closely concerned with the theme of *Tom Jones* and the characterization of Blifil.